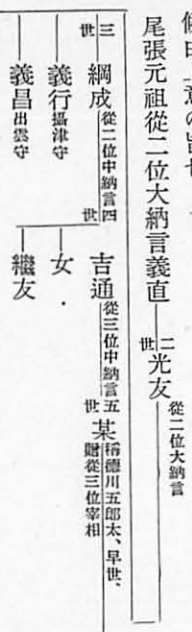


趣共申上候。聞番中も何と哉らん御様子有之旨は承候由に候。十三日安藝守様御登城、但馬守殿も御登城候て、御相續被仰付候と沙汰仕候。途中にて町人共申罷通候を承候へば、昨日尾張様早駕籠にて御歸、追付御門々寔迄も閉ぢ申候。上様と御問答有之如此と、申罷通候者有之候。以上。一、或人來狀云。十二日尾張殿御家老共、御城へ被爲召、尾張殿近年段々不行跡に付、御内々を以て上意の趣も有之候處、且て不被相嗜不届、至極被思召候間、急度可被指扣候。家老役の者共も諫言にも不及、其通に仕罷在候儀、沙汰の限に被思召候由被仰出候。翌十三日松平安藝守殿被爲召、尾張殿右の趣に付隠居被仰付、家督松平但馬守へ被仰付候。依之右の趣上使に被仰渡候。御勤相濟御請被仰上候後、御目見被仰付、安藝守儀々様の御使初て相勤、大儀に被思召候由上意の旨也。



々不思議成事に御座候。四十七人の時分よりは血の色こく御座候。越後亂の時節に似寄申候由にて、先年も翌年春迄涌申由に御座候。當年も來正月二月頃迄には、しかくと相知可申候。又々春に成可申上と匆々申達候。以上。

午十二月 日

尾州在任僧徒より當春來狀云。當國大守中納言殿儀、段々身持國政不宜候に付、去十二日江戸表にて逼塞同様の上意にて、下々に申候は、嚴しき閉門の様に被仰出、十三日に市谷上屋敷より、糺町の屋敷へ移被申様にとの御事にて、爲上使水戸の松平大學頭殿・同播磨守殿并松平安藝守殿を以て隠居、直に糺町屋敷に居住、同日朝中納言殿從弟但馬守殿を御城へ被爲召、於御座の間大納言様御列座、松平左近將監殿を以て中納言隠居に候條、尾州の家相續候様に被仰渡、徳川御稱號被進候由被仰出候。右十二日の様子、當所へ十五日晝頃相知候。俄に一家中寺社・町方・在々迄門戸を打ち、高咄も難成嚴き慎にて肝を冷し居候處、十三日但馬守殿へ御相續の事、十六日の夜相知候。十七日早々觸廻し春を二度迎申心地にて候。一日一夜程氣つめ申事、至極

友著 但馬守 義淳但馬守

六 繼友 從三位中納言、實吉通 七 宗春 從三位中納言、友無子。世 弟以叔父繼統 世 弟以弟繼統。今茲以弟繼統ヲル。宗春

八 義淳 中納言 從三位 但馬守義淳一繼。攝津守義孝家領備前州須三石。義孝ハ攝津守義行ノ子也。

一、公君二字稱謂之事。蘇東坡墨君堂記云。公君二字稱謂之事。蘇東坡墨君堂記云。

凡人相與號呼者。貴之則曰公。賢之則曰君。自其下則爾汝之。雖公卿之貴天下猶畏而心不服。則進而君公退而爾汝者多矣。獨王子猷謂竹君。天下從而君之無異辭。

一、尾州僧徒より來狀

尾州居住の僧徒より、舊臘の來書に云。此元に野間村と申所に、兼々御聞及被成候通り、義朝公御墓所御座候。此所に古來其頃御首を清め申池有之候て、天下に騒動又は惡事有之候得ば、血涌き申候間血の池と申傳候。先年天草亂。越後亂の節、且又丸橋時分并大石四十七人敵討に、何れも血涌き申候。又當年も十一月初より、於今血涌き申候。扱

成事に逢候て心痛可申様も無之候。以上。

正月十八日

一、尾張光春侯の隠居一説

或云。尾州御家老の内、御附人成瀬隼人正・竹腰志摩守兩人は、尾公御在江戸の時は、何時も尾州に罷在候趣に候處、近年は此兩人江戸御詰の中も必指添罷在候。大酒法外の事のみ付、附添罷在候よし。正月十二日隼人正・志摩守兩人及成瀬大和守・成瀬豊前守・河村平馬五人、被爲召於羽目間御老中列座、密々被仰含候趣有之候。其仔細は外様へ相知不申候。尾張殿常々御行跡不宜候に付、御指扣急度御憤可有御座旨被仰渡、御家老も心附不申、不調法の由御叱有之由に候得共、其趣相知不申候。御城附も詰合罷在候へ共、御家老へ被仰渡相濟候以後、早速致退出、十二日より罷出候。十三日松平安藝守殿并松平大學頭殿・同播磨守殿被爲召、於御黒書院縁頼御老中列座、溜詰衆着座にて、尾張殿隠居被仰出候に付、御使の趣御書付左近將監殿御渡、其後御前へ被爲召、猶又上意御直に被仰含、糺町屋敷へ上使御勤、重て登城御受被仰上候。但馬守殿御家督御相談の儀は、先